水神信仰からみた霞ヶ浦の環境

The Lake Kasumigaura as an Environment of the Residents on the Shore: by Referring to Suijin, their Guardian Deities of Water

五十川 飛啓* 鳥越 皓之**
Takaaki ISOGAWA Hiroyuki TORIGOE

The purpose of this paper is to consider an environmental policy from a perspective of the residents on the shore of Lake Kasumigaura. So far, various policies were attempted against the considerably polluted water of Kasumigaura, the second largest lake in Japan. Some of these policies, for example, were to enlighten people’s environmental consciousness or to control the water pollution. However, most of these attempts were not remarkably effective. Therefore, this paper tries to understand the residents’ image of Kasumigaura by referring to the religious symbol of the shore, Suijin, a sort of guardian deity of water.

By looking at the functions and the distribution of Suijin throughout Kasumigaura, the paper clarified how the residents maintain the relationship with Suijin. Firstly, people by the shore communicate with Suijin through community. Secondly, their relationship was intentionally maintained durable through the lasting character of community. Furthermore, through the Suijin’s mediation, the residents on the shore pursue the relationship with the lake Kasumigaura at the aspect of Buji, a status of safe and calm social relationship.

From the above investigations, the paper argues that the environmental policy has to secure the social relationship in the local communities, which enable the residents to communicate with the lake.

1. 問題関心

イギリスの日本学研究者、C. プラッカーは、日本人の信仰の特色について次のように指摘した。すなわち「日本の知的な人々の間では積極的な世俗主義が支配的になりつつあるが、今日でも、人間の生涯におけるすべての見災は霊的な領域から来るという信仰が、依然として社会の多くの部分に生き残っている。病気や事故、早魃、火事は、怒れる死者の霊か、神霊の祟りのせいである。したがって、これらの不遇の原因を見つけるには、これらのものが住む他の次元を覗き込み、どの霊がそれとかかわり、何を怒っているかを尋ねなければならない」（プラッカー、1979、3頁）と。

私たちが物理的に目にするこの世界以外の、他次元の世界のもつ意味については、日本人の信仰観の研究として、宗教学や民俗学者によってすでに多くの研究蓄積がある。けれども、外国人であるが故のこの直観的な指摘は、‘日本の知的な人々’に反省を促す契機を与えてくれる。ちなみに、わが国で2番目の大さをもつ湖、霞ヶ浦を1周してみると、その水辺には膨大な数の石碑や宗教的建物が並んでいるのにも気づく。水辺に沿って歩きはじめると300mにほど近い出水pressãoというのも通報ではない。とりわけ水神の石碑の数が際だって目立つ。多数で手を繋いで対象物をグルッと囲んだときに人の鎮という表現をすることがあるが、まことに水神の鎮が霞ヶ浦を取り囲んでいるのである。

霞ヶ浦湖の水質や陸域との関係である水辺に、これほどおびただしい数の霊的観象物が配置されているのはなぜだろうか。プラッカーは、いま引用した文章の後で、「共同社会の繁栄は、これら非人間的なものの好意によっては、いう表現をしている。筆者たちはこのような表現に同意しながら、水神などの非人間的なものが、災害を防いでき、湖の幸をもたらすであろうと信じた漁民や農民の目を大切にして、霞ヶ浦の環境の課題を考えたいと思っている。それが私たちの究極の意図である。

本稿での具体的な研究目的は以下のとおりである。水質汚染度と思定している霞ヶ浦の湖に対
する対策として、いわゆる自然科学的および工学的分析に加えて、人文・社会科学的分析が期待されるようになってきた。この人文・社会科学的分析は将来、多様な方面で分析が可能と想定されるが、いままでの分析でとくに欠けていたのは、霞ヶ浦の水辺に住む人たちの目線からの分析である。つまり、霞ヶ浦に直接かかわってきた人たちの基本的な考え方や感情をふまえての霞ヶ浦対策という視点である。

その考え方や感情の理解のひとつの方法として、水辺に象徴物として存在する水神の機能と分布状態を調べて、そこから周辺住民の霞ヶ浦に対するイメージ、素朴な思いをもつなら、霞ヶ浦に対する“気持ち”を理解しようと努めた。もとより、本稿は水神を対象としての特定の観点からの分析にすぎないことから、そのことでいて、周辺住民の霞ヶ浦に対するイメージの総体をうまくあらわるとは到底思ってはない。けれども、水神を対象にしてこそ、みえるものがあると信じている。

2. 水の神研究からみる水神信仰の性格

（1）水の神信仰の基本的性質

水神の研究は主に民俗学者によって深められてきた。民俗学やその隣接分野が明らかにしてきた事象を以下に整理しておく。なお、霞ヶ浦水系で水神と呼ばわれている水の神は地域により多様な表現のされ方をしているが（たとえば東北地方ではスイコなど）、この研究史の節では、一般的名称としての「水の神」という表記を採用する。

水の神はかなり古くから文献に登場する。平安初期の書物「日本源経記」を分析した植田敏晴（1992）は、仏教の呪力を強調したこの書物が、土着神のうち、ときに水神を主要な批判対象にしているのは、それだけ水の神の力が民衆の間に深く浸透していたからではないかと推測する。

では、教養のある人たちからなる仏教の側から強い批判をうけた水の神とは、どのような性格をもつ神なのかであろう。平安期間は大きなく下が、民俗学が少しある過去と現在の民衆の土着神・水の神の性格をかなり明かにしてくれている。

小野重朗（1979）は、水の神は、日常の生活用水のほとんどに祀るものとし、稲作のための用木の側に祀るものと分けられると指摘した。前者の例としては井戸（宮本、1958）をはじめとして、集落の洗い場などがあげられる。他方で後者は、農業生産のための水量確保という目的に結びついている。そのため、個別の集落の範囲を超えて、水路に沿うぼった山の側にも水の神を祀ったという。これに沿うもので水の神は祀られるということになる。たとえば、もっとも人里離れた場所である水田地帯の山について、宮田是、山岳開基の縁起を記が登場することに注目し、「その場所は、山神が支配するところであるが、同時に水神の力も働いている」（宮田、1993、8頁）と指摘する。つまり、人びとにとって高山は水流分源でもあったのである。山の神が田の神になるという信仰についても「あるいは、水の神が、その媒介となって成立したものかもしれない」（池上、1959、152頁）と指摘する研究者もいる。

このような水の神は山の中里にも存在することになるが、その存在の範囲の広さに加え、水の神は他と土着神がもつ機能をその根拠において着実に有している特徴をもつ。吉成直樹（1991）は高知県中央部での民俗調査から、一見して祖霊信仰としてもみない七月・盆行事の儀礼のなかに水神信仰の要素を多くみいただし、実はそれらの儀礼の基盤には水神祭祀が置かれているのではないかと論じている。また、大森恵子（1985）は広く各地の稲荷神社をとりあげながら、稲荷神というある特定の固有神を祀ることのなかにも、水の神的な性格をもった信仰をみいただせることを示した。それまえ、前出の小野によれば、われわれにもなじみの深い『日本の代表的な夏祭りとして名の知られている八坂（祇園）・北野（天神・石清水（八幡）などの神社はみな水神的な性格を持つもの』（小野、1979、216頁）だというのである。

このような指摘を並べていくと、「このようにして話す時は水の神の範囲は限りなく広がることになって、止る所を知らない」（高谷、1984、13頁）という感慨に素朴に同調してしまう。しかしその多様さには理由があるはずだ。私たちの関心の近いところでは、次のような野本寛一の指摘から学ぶことが必要である。

環境民俗学者である野本によると、ある神観念を厳密に規定することは容易ではないとい。というのも、置かれた環境条件の違いによって人びとは異なる環境観をもっているからであり、それゆえに神観念といったときにも「具体的な環境空間から遊離することは許されない」（野本、1999、88頁）とする。そのうえで、水の神の多様さについても触れ、それは水をめぐる環境の多様さがあるからであり、環境構成要素のなかには、人にたいして恩与的側面と阻害的側面の両方を示すものがあるのだ。
本、1999、103頁）という。いまここで、環境構成要素の「害虫の側面」と「害虫的側面」を、人びとが水の神を信仰する心持ちというところにポイントを置けば、水に対する「恵み」と「恐怖」とやさしくいいうまくすすることができるだろう。つまり、人びとは自らの生活する自然環境やさまざまな社会的条件に応じてそれぞれに水に「恵み」を求め、「恐怖」を抱く。しかしながら課せられた条件は自らの自由にはならないものである。そのとき、人びとはこの条件を差別する「超自然的存在」（宮川、1983、423頁）に対して、水の「恵み」への寄与や「恐怖」の解消を願うのである。この、「恵み」と「恐怖」という相矛盾する要素が水の神信仰の基本的な性格としてあるという指摘は貴重である。

（2）利根川流域・霞ヶ浦の水神信仰と機能の類型

以上のような水の神信仰の、一般的な特徴をふまえたうえで、利根川流域・霞ヶ浦で、水神と呼ばれている水の神について検討をしよう。

桜井正三利根川の下流、銚子地方の水神を調査し、検討している。銚子地方はかつて海運と利根川水運の接点として栄え、水運関係者が多く就業していた。その「河岸や船溜まりには例外なく水神宮が祀られている」（桜井、1992、212頁）その信仰を担ったのが水運関係者であったという。環境条件として「水神信仰を決定的なものにしてきたのは、銚子川口が難所であったという特殊事情」（桜井、1992、224頁）があったからである。また、水神宮の由来を記した文書のなかから桜井は「高船航、五大力船の船中安全と繁栄、築堤の願い」と（桜井、1992、217頁）を示した。つまり、信仰の担い手たる船乗りたちは、水難に対する「恐れ」の解消とともに、生業の「恵み」への寄与を水神に求めたのである。

また、利根川の中流域、千葉県我孫子市にある手賀沼周辺の水神を調査した柳利佳子は、我孫子市では全ての地区に水神が存在しているという。なぜかというと、我孫子市はその環境条件からみれば、洪水によって甚大な水害を被ってきた地域であるからであり、とくに水害の頻発した地域の周辺に水神が多いという。それから柳は「ここまでは水がこないようという願い」（柳、1996、28頁）を読むとされている。その背景には、水害に対する「恐れ」があったといえるだろう。ただ、洪水の激減によってその信仰も変化し、いまでは「水神の信仰はほとんど忘れられようとしている」（柳、1996、28頁）。つまり、環境条件の変化によって「恐れ」を解消する機能としての性格が弱くなった水神は、その存在自体も希薄になっているというのである。

このように、同じ利根川流域で河畔に位置する2か所の事例をみるだけでなく、その置かれた自然環境の条件や、水神信仰の担い手により、まったく異なった機能を水神に求めてきたことが分かる。

一方、直江兼治（1971）は利根川流域を広範に調査した結果にもとづき、水神信仰を次の7つの類型化している。すなわち、①飲料水の守護神としての水神、②灌漑用水にかかわる水神、③筏乗りや船頭が信仰する水神、④漁民の祖神水神、⑤水難よけ・防き水の神としての水神、⑥河川の伝承、⑦猿ḑ貫、竜宮宮の伝承である。この類型は、信仰対象における分類と信仰の担い手による分類、または祭祀と伝承が混合しているなど分類基準がひとつではないため、やや分かにくい面があるものの、この地の水神信仰の全体が見渡せ便利である。この直江の7つの類型を、「恵み」と「恐れ」という先ほどまでみてきた水の神信仰の基本的性格をもとにして、流域の環境条件（自然環境、担い手、生業）加え、水神信仰の機能として分類し直してみる。①生活用水の恵み、②農業用水の恵み、③漁業の恵み、④水運業の恵み、⑤水難の恐れ、⑥水害の恐れ、である。さしあかし、この分類を用いつつ、以下で霞ヶ浦湖岸域の水神信仰の機能およびその分布について分析していくことにしたい。

3．霞ヶ浦湖岸域における水神信仰の機能と分布

（1）機能の分布からみた水神信仰の検討

1）概念と水神信仰の機能の状態

霞ヶ浦流域には、200以上の水神の祠があるとされている。本稿で対象とするのは、筆者たち自身の調査による57か所の水神である。これららの水神は、霞ヶ浦（西浦）の湖岸域を中心としたものであり、それに加えて、流入河川の中流域で調査をおこなった2か所と、人びとの水神へのかかわりのありようが看取できた北浦湖岸域の1か所を含めた。その結果として分布状況を図1-1に、また個別の情報を表1-1にまとめた。以下に、これらの資料をもとにしながら、まずは分布から読みとれる水神の性格について考えることにしよう。

はじめに水神信仰の機能については、く漁業の恵
み」をその機能としても水神がとくに多い（18/30か所）。ついて「水難の恐れ」となっている（16/30か所）。これらは「恵み」と「恐れ」という対照的な機能にもかかわらず、地元の聞き取りでは両方の機能を併せて説明されることも少なくない（10/30か所）。また、この2つの機能については地域的偏りがみられず、まんべんなく分布しているのが特色である。他方で、「水害の恐れ」の解消という機能を持った水神に関しては、かつて霞ヶ浦が洪水が水害をもたらしていたことから考えれば予想外に少なくない数にとどまっている（11/31か所）印象をもつ。さらに、「農業用水の恵み」については2か所で語られるにとどまっており、「生活用水の恵み」や「水運の恵み」についてはそれぞれの機能を語られる水神をみつけたことはできなかった。
それらのこともから何か読みとれるだろうか。

2）漁業の恵みという機能

まず、「漁業の恵み」という機能についてであるが、この機能がまんべんなく地域的に広く分布しているという事実は、水神を祀る主体、つまり担い手（おかるわせて理解する必要がある）と判断される。それはすなわち、水神は漁業者によって祀りを担われているものが多いということである。

水神の祀りが漁業者によって担われていることが確認できたのは15か所で（28か所中）であるが、そのうち11か所で「漁業の恵み」という機能がみられる。これらの水神では、たとえば、旧桜川村（現稲敷市）のJ-03で漁師が「たそがれの海をとらせてもらったのかも知れない」と言っているように、漁業者自身の経験からこの機能が示されることもあるし、漁業組織が祭りをおこなっているから漁業の恵み、との説明がなされることもある。しかも、このような現在の担い手からだけでなく、地元では人びとの過去の経験や記憶にまでさかのぼってこの機能が思いおこされるもののである。そのため、集落が主となった担い手となっている水神においても、たとえば旧玉造町（現羽方市）のF-04の住民が「昔はほとんどの家が漁業だったから」と語るなど、話者の記憶の範囲で「漁業の恵み」の機能が付与されていることがあるのである（4/13か所）。また、現在は担い手のない、その意味では放置されている石岡市のC-03水神境内も、親世代の漁師が祀っていたという記憶から、同様の機能が説明されている。

ところで少し時代をさかのぼると、戦前から昭和30年代半ばまでにかけて、霞ヶ浦湖岸域において漁業者の数が相当に増えた時期があった。旧麻生町（現羽方市）のG-09においては、最盛期には農業と漁業の集落における割合が、実感として「4分6分」にまでなったという。それは端的にいうと漁業がとくに発展した業種であったからである。とえば美浦村のL-05においては、当時の平均賃金の倍は漁業で稼ぐことができたという。その当時、漁師たちにとっては「漁業の恵み」というものが水神に対して頼れる重要な機能であったとも想定される（60）。

3）水運の恵みという機能

他方で、「水運の恵み」を担う船頭の記憶はすでに人びとの間にほとんどとどまっている。たとえば土浦市にあるA-02の水神宮は、かつては高瀬舟を使って水運をおこなっていた人たちによって祀られてきたもので、漁業者たちが熱心に祀り受けたものだという。けれども、「水運の恵み」についての説明は聞かれず、あくまでも「漁業の恵み」を祈るものなのである。また、同じく土浦市のA-05にある2つの水神宮の内のうちのひとつは明治10（1877）年頃建立だが、その側面には「仏具中に」と記銘されている。ところが、ここでも現在は「水運の恵み」の機能をみることができない。明治29（1896）年に常磐線が開通して以降、霞ヶ浦湖岸の水運としての利用が急速に衰退し、具体的に経験している人もはやいないことが、現在では「水運の恵み」という機能を発現する人がいないことの理由と思われる（60）。

このようなことから、水神信仰の担い手の変化と記憶の継続／切断によって、その機能も変わっていくことが十分に想定される。ゆえに、現在の水神のもつ機能が過去から変化したと判断するのは早計であるといえる。したがって、現在は広く分布している「漁業の恵み」という機能についても、けっして将来にわたって固定的なものと考えるべきではないだろう。現在では各地で漁業者の減少が著しく、漁師がやっているのは60歳以上の人家ばかりだともいわれる。すでに、漁師が集落に数人しかなくなってしまったことによって、数年前に祀りの組織である水神論を解散した旧桜川村の事例（J-03）などもあるのである。

地元において関心が弱まっている水神は、依然として「漁業の恵み」機能を保ちつづけているものの、条件の変化がさらに進めば、何の石祠なのかさえ分からなくなってしまう可能性もある。たとえば潮来市にあるH-01水神宮は、関係者の5人を訪ね歩いて、
ようやく水神であることが判明した。ある住民はそれももっと誰々の家に氏神であったと説明し、そばにあった木を切ったら漁師に怒られたという経験を不思議がっていたりするのである。

4) 〈水害の恐れ〉の解消という機能

〈水害の恐れ〉については、かつての水害の記憶、たとえば洪水がくるたびに水没していた稲を刈ったという記憶は地域的にまんべんなく広く聞かれるのが、必ずしもそれが水神信仰の機能としては反映されていないようにも思われる（の）。とはいえ、地域的な分布からみれば、それが石岡市・玉里村・旧玉造町という霞ヶ浦の北部に比較的多くみられると指摘できる。加えて、霞ヶ浦の最下流にあたる潮来市の2か所（H-01、H-02）、小野川下流域にあたる旧江戸崎町の1か所（K-01）、また流入河川の中流部である八郷町の2か所（Y-01、Y-02）がそうであり、湖岸というよりも河川において、より水害が意識されている。とくにK-01については、現在は開発が進んでいるが、かつては荒れ川であった小野川近くに位置しており、祭祀の際には山から土を運んできた水神宮の周りに盛っていたのだという。水神宮の位置する場所が湖岸よりも高く、「山のようになっている。現在は土を盛るという行為はおこなわれていないが、〈水害の恐れ〉が祭りでの儀礼と結びついていたことが分かる。

ただここでは、〈水害の恐れ〉の解消という機能がみられた11か所のうち、9か所までが業岸で担われている水神において説明されていることに注目しておきたい。その理由については、現状では明確に
表一 水神の所在と説情報

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A-01</td>
<td>川口町2丁目、川口運動公園入口横</td>
<td>3</td>
<td>湖の入江に正面对向</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>水神宮や水天宮がある。水神祭にて神船の移動が観られる。</td>
</tr>
<tr>
<td>A-02</td>
<td>手野町、石田集落（堤防上）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>魚船一艘、漁師</td>
</tr>
<tr>
<td>A-03</td>
<td>手野町、田村川水門（堤防上）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>「手野の水神さま」と呼ばれる。</td>
</tr>
<tr>
<td>A-04</td>
<td>沖浦町、第一農場と第二農場の間（湖中）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>担手</td>
<td>漁師</td>
<td>湖中にはコンクリート製の柱が立つ。</td>
</tr>
<tr>
<td>A-05</td>
<td>沖浦町、旅館上より近く（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>湖水の漁業組織が管理。水神宮に「船持ち中」と銘記がある。</td>
</tr>
<tr>
<td>A-06</td>
<td>大宇賀川（尾川下流）</td>
<td>かつて川の中に位置</td>
<td>現在のところ行方不明。かつて水神祭では</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>B-01</td>
<td>大洋町茂字崎崎、八坂神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>八坂神社内に安置されている。</td>
</tr>
<tr>
<td>B-02</td>
<td>大洋町茂字御殿、有賀ふれあい横著（堤防内側）</td>
<td>4</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>かつて4町の水神宮。奥の1町はかみせ神社。</td>
</tr>
<tr>
<td>B-03</td>
<td>大洋町茂字二ノ宮（水田内）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>以前は島になっていて築かれがちだった。</td>
</tr>
<tr>
<td>B-04</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>3</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>左の水神宮には「水内安全」と銘記がある。</td>
</tr>
<tr>
<td>B-05</td>
<td>大洋町茂字崎崎、長崎崎倉塚そば（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>担手</td>
<td>漁師</td>
<td>移動設置前に湖に向けして漁師が漁を始め、水神宮に「栂崎付近」と銘記されている。</td>
</tr>
<tr>
<td>B-06</td>
<td>大洋町茂字東金、長崎崎倉塚そば（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>日の出の方角を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>漁師</td>
</tr>
<tr>
<td>B-07</td>
<td>大洋町茂字高倉、長崎崎倉塚そば（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>どちらに移動したかは不明。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>C-01</td>
<td>大洋町茂字高倉、八木集落地先（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>湖に正面を向く。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-02</td>
<td>大洋町茂字高倉、八木集落地先（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>以前は水門の場所にあった。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-03</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>親世代の漁師が祀っていたが、現在は何もしていない。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-04</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>船工事を営む個人のものだった。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-05</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>以前は水門の場所にあった。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-06</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>以前は水門の場所にあった。</td>
</tr>
<tr>
<td>C-07</td>
<td>大洋町茂字四ツ塚（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>以前は水門の場所にあった。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>D-01</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>漁師</td>
</tr>
<tr>
<td>D-02</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>D-03</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>D-04</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>E-01</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-02</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-03</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-04</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-05</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-06</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>E-07</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>所在地</th>
<th>倍数</th>
<th>水面との関係</th>
<th>移動</th>
<th>担手</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>G-01</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>G-02</td>
<td>大洋町茂字上高崎、一ノ棚神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>移動</td>
<td>担手</td>
<td>平成16年の改修に水浸し家を含む6集落の合団で建て直したものである。</td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>所在地</td>
<td>仮数</td>
<td>水面との関係</td>
<td>移動</td>
<td>機能</td>
<td>担い手</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>--------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>旧麻生町</strong></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>G-03</td>
<td>大字橋門、集落内（旧郷岸沿い）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>×</td>
<td>水難</td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-04</td>
<td>大字橋門、小高根里排水機場換（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-05</td>
<td>大字島並、並並み瀬に近い（堤防内側）</td>
<td>3</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-06</td>
<td>大字麻生字古宿、八坂神社南側内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-07</td>
<td>大字麻生字古宿、八坂神社南側内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-08</td>
<td>大字麻生字荒部、古見湖に近い（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td>○</td>
<td>漁師/水難</td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>G-09</td>
<td>大字白鳥、北浦橋と北浦漁港の間（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>千葉の渡船場に近い</td>
<td>×</td>
<td>集落</td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>湖来市</strong></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>H-01</td>
<td>大字永山字堤内（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>H-02</td>
<td>大字永山、二ツ家集落（北利根川横堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>東栄町</strong></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>I-01</td>
<td>大字上之島、新川幹線排水路沿い</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>I-02</td>
<td>大字上産田字構内、和歌山県東部</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>I-03</td>
<td>大字上産田字水神、集落内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>J-01</td>
<td>大字飯出字野中、堤防内側近い（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>J-02</td>
<td>大字古賀字大坪、大坪用水機場内（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>J-03</td>
<td>大字古賀字下宿、古渡渡橋近く（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>J-04</td>
<td>大字古賀字下宿、須賀社神社内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>K-01</td>
<td>大字安川字天王（水田内）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>日駒村</strong></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>L-01</td>
<td>大字大山、大山身渡り歐内（舟渡りの堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-02</td>
<td>大字馬瀬、安川渡渡機場内（舟渡りの堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-03</td>
<td>大字根木、根木排水機場内（堤防内側）</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-04</td>
<td>大字根木、根木加茂川、根木加茂川排機場内（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-05</td>
<td>大字木木下字、木木渡舟東端（堤防外側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-06</td>
<td>大字舟子下字、舟子集落、舟子集落（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>L-07</td>
<td>大字舟子下字、舟子集落（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>M-01</td>
<td>大字島津、島津窓二機場内（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>M-02</td>
<td>大字大田、大田窓東（堤防外側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>Y-01</td>
<td>大字横岡字高野、高野原近い（堤防内側）</td>
<td>2</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
<tr>
<td>Y-02</td>
<td>大字横岡字長崎、稲荷神社境内</td>
<td>1</td>
<td>湖に正面を向く</td>
<td></td>
<td></td>
<td>倉敷</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 旧霞浦町は2000年（平成17年）3月28日よりかすみがうら市に、旧玉造町・旧麻生町は同月2日より行方市に、旧栄町・旧桜川町・旧江戸崎町は同月13日より稲敷市に移行している。また、八郷町は同月10日より西市となる予定である。
水神信仰からみた霞ヶ浦の環境

述べるだけのデータをもちあわせていない。ただ、
担い手がその性格に強く影響を与える調査信
仰の特徴から推定して、集落の成員すべてが関係す
る住民や農業ともかかわって、〈水害の恐れ〉が出
ているのだと解釈できないだろうか。

5）〈水難の恐れ〉・〈農業用水の恵み〉・〈生活用水
の恵み〉という機能

他方、広く分布している〈水難の恐れ〉の解消と
いう機能については、かつて盛んであった湖上交通
や水運業がなくなってしまった湖にかかわる人がいるか
ぎり、経験としても記憶としても顔を出す可能性を
つねにもつ機能だというえる。たとえば、これは流入
河川の中流域である八郷町のY-01であるが、かつて
そこに河岸があったという記憶をもとに水運業関係
者の安全が語られるが、それと同列に、集落の人び
とが現在まで川とかかわる機会をほとんど含めて〈水難
の恐れ〉の解消という機能が説明されるのである。

加えて、〈農業用水の恵み〉という機能が現われ
ているのは2か所にすぎない。農業用水のほとんど
は河川水であり、その確保がとくに求められていな
いことが分かるし、またそれが現状である。

また、〈生活用水の恵み〉という機能がみられな
いことからは、人びとが湖に対して、飲用・洗い
などの生活用水として必要な水の清浄化をとりたて
て求めていないことがうかがえる。このことは、現
在の湖水が上水道という間接的な利用を除き、直接
的な飲用や生活用水に供されていないということか
ら考えれば、自給できるところである。このような
事実も、昨今の霞ヶ浦の水質に対する関心とかかわ
らせて注目してよい。

（2）集落の入口の象徴としての水神

さて、水神の空間分布から読みとることは、こ
れまでにあげた水神信仰の機能に関することばかり
ではない。それがどの場所にどのように存在してい
るかということから以下のことも指摘できる。

ひとつには、湖岸域にある水神の多くが湖面を向
いていることが注目される。もちろん、霞ヶ浦では
少し数年前をずらしながらも、戦後から全周にわ
たって堤防敷設の工事がおこなわれ、水辺の環境が
よく改善されてきた。また、土地改良事業の進展
により、陸地の地形も大きく変わった。そのため、
ほとんどの水神が移動を経験しているといってよ
い。けれども、改めて設置される場合においても水
面を向いて設置される例が多いのである。たとえば
これほは極端な例であるが、土浦市にあるA-04の水
神宮は、もっとも水際にあったものが、堤防工事に
ともなって現在地の湖水に移動された。しかし、
それは依然として湖のほうを向いているため、陸地
からはどうやっても正面から拍むことができない。
元ででは〈舟から拍むのが本来だから〉といってそ
のままにしているのである。

一方、現在は水面を向いていない水神にも、それ
なりの理由のあることが多い。たとえば石岡市のC-
01水神宮は、現在は堤防のすぐ内側の、周囲には
水田しかないようなところに水面を向きわけてもな
く設置されている。住民によると、もともとこの水
神宮はかつて集落の鎮守の神社とその鳥居とも
に、一直線に並ぶことができたもリ湖側に設置され
ていた。堤防設置の際に集落で討議された結果、そ
の位置関係を崩すことが起きるのではないかと考え
られたため、同じ線上で同じ向きのまま、現在の
位置まで移動されたというのである。つまり、水面
のほうが動いたので不自然な向きになったのであ
る。

他にも、現在は堤防付近に設置されている水神の
なかに、もともとはかつての舟運を通る入り口で水
面を向いていたという所も少なくない。その場合、
移動しても向きだけは変えられていなことも多い
のである（たとえばL-05）。さらに、いままで移動
を経験していない、移すこと拒まれてきた水神に
いたっては、地形が変わったのだから現在は向きが
水面を向きていないこともある。堤防の内側
で陸側を向いている旧霞ヶ浦町B-06の水神宮など
も、以前は砂州の先端部分にあったというのであ
る（他にもG-09）。

もうひとつ、水神は現在の担い手いかんにかかわ
らず、基本的にはあくまで集落に帰属するものと考え
られているように思われる。それが象徴的に現わ
れているのが石岡市のC-02とC-03の両水神宮の関
係である。これらの水神宮は、どちらも湖から伸ば
された水路にあつといったが、土地改良事業の際に
それぞれ現在の排水機場のなかに移動された。
そして、お互いの位置は100mほどしか離れて
いない。ところが、その間に集落の境界線が走って
いる。そのため、それぞれの水神の存在する集落の
入は、自分の集落の水神については記憶や機能
を語るもので、隣接の水神については、ほとんど何
も把握していないのである。

同様に、他の多くの地域においても、基本的には
「この水神さまは〇〇（集落名）の神さま」という
説明のされかたが一般的である。たとえば、美浦村にあるL07の水神宮は、戦前までは集落によって祀りがなくなされてきたというが、現在は漁業組合の支部で祀りを担っている。集落のある漁師はこのことについて、戦後、みなの生活が苦しい時分に祀る余裕があったのは漁師のほうだったからという説明をする。なぜなら「水神宮はあくまで川端の部落の神さまだから」というのである。

これら、湖面を向いている水神が多いこと、かつての舟溜りや陸地の先端部分に水神が置かれていたこと、水神が集落に帰属しているということは、3地点から、湖の側から集落に上陸する者たちにとって、水神が集落の入口を象徴する存在であったのではないいか、という推論をすることが許されるかもしれない。

水神は、湖面から見たときの集落の“玄関”脇に存在してきたのである。

4. 水神と人びとのかかわり

(1) 集落の神としての水神

とはいえ、前々節で論じた水神信仰の機能群は、＜恵み＞への寄与という側面については就業可能な業種の増加や交通における代替手段が普及し、また＜恐れ＞についても堤防設置などの条件整備により緩和されるなど、全体として弱化しているようにもみえる。先ほど検討した水神の“ムラの入口論”においても、水上交通が途絶え、漁師が減少、地形が変わったいまにとっては、すでに玄関としての役割はほとんど重要ではないということも可能であろう。

このような水神をめぐる条件の変化をみると、なぜそれとも祀りつけられる水神が存在するのか、という素朴な疑問が生まれてくる。あるいは、旧麻生町のG-08の漁師は「舟を出すときに水神さまが目に入るんだ。そのときに、心のなかで拝むんだ」と語るが、そのときこの漁師は水神に何を祈っていたのでだろうか。これらの人々は実際のところ、ただ特定の機能を維持しようとした、また特定の機能だけについて祈っているのではないそうなのである。

この点については、さらに踏み込んだ検討が必要である。そのため、以下のようにする。人と水神とのかかわりが典型的にかかがれた旧麻生町白浜集落のG-09水神宮をとりあげ、それをめぐる人びとの対応をもう少し詳細にみていくことになる。

その白浜集落は、本稿で主としてとりあげた霞ヶ浦（西浦）沿岸部ではなく、東隣りの北浦のほりに位置する世帯数120余りの集落である。縄野善彦の研究によると、かつて近世には「いままでは到底考えられないような湖全体を管理する巨大な自治組織、広大な霞ヶ浦・北浦に生きるすべての湖の民の組織」（縄野、1998、240頁）があり、それぞれ霞ヶ浦四十八津、北浦四十四ヶ津と呼ばれていた。白浜は、その北浦における津頭を務める集落であった。現在でもそこに、北浦全体を統括する漁協の事務所が置かれている。集落の湖岸には他の地域と同様に堤防が造られているが、その堤防の内側に、G-09水神宮がある。

ここには水神を祀る石祠が2つ設置されているが、古いぼうの水神宮は享保2（1722）年の建立である。また、水神宮の手前に有常夜は2つしかでており、右の有常夜は寛政12（1800）年に奉納したものである。一方、新しいぼうの水神宮の石祠、また左の有常夜はいずれも昭和59（1984）年に設置されたものである。さらに、平成2（1990）年には以前水神宮のそばに生えていたといいサルスベリを再び植樹し、平成12（2000）年に石製の新しい鳥居が奉納される、といった具合に丁寧に手入れられつつある。

このうち、寛政12年の有常夜には「湖中安全／魚漁の報」との銘銘がある。この銘銘は白浜の歴史的な位置づけから水神信仰の機能として、水神信仰への寄与や＜水難の恐れ＞の解消があることを予想させる。実際のところ、かつて白浜では漁業および水産業に従事する者たちを成人たとして講組織として水神講を設けており、旧暦9月28日の水神宮の祭礼はこの水神講を中心として行われてきた（三宅、2004、267頁）。住民たちも白浜が漁場でありつづけてきたことをふまえ、水神の神であることに一定の重みを置いているのだろう。

ところが住民たちは、けっしてそれだけが水神の性格ではないともいう。白浜の住民たちが共通する水神の説明は、水神さまは湖に関するあらゆる神である、だから、漁業者だけではなく集落の住民全体にかかわる重要な神なのだ、というものである。たとえば、漁業が重要な位置づけにありつつも、他方で人びとは田や畑を耕していた。白浜には田園のしき耶神社があり、農耕全般に関する神としては稲荷神社のウェイトが高いという。しかし、それでも田や畑の水が枯れれば困るのである、この水を差配するのが水神だとするのである。つまり、「農業用
水の恵み」という機能も担っているというわけだ。さらに、霞ヶ浦の流出口に逆水門ができるまでは庭まで水がたまったといい、水濁い穀を刈った経験もあるという。白浜の水神は、「洋食海の町の長い体を使って堤防になると信じられている」という（三宅、2004、267頁）から。「水神の恐れ」の解消の機能も担うものだというのである。

実際の住民たちの対応をみてみても、たえば昭和59（1984）年の新しい水神宮・常夜燈の設置等の改修は、集落の講（まつ）全体によって担われたものである。これにより、堤防設設品の際に集落から起こった動きであった。水神宮前を通る集落の中心からの道はメインストリートであったが、かつてこれは水神宮の前方の渡船場につながっていた。湖上交通が盛んであったころは、この渡船場から対岸に渡るのが主であった。また、集落の住民たちの舟も周辺の砂浜に揚げていたという、まさに水神宮は湖面から集落の玄関にあたる位置にあったといえる。

その水神宮が、堤防工事の際にはその内側になってしまうことが分かった。そこで、水神宮よりカワ（北浦）がみえなくなってしま水神さまに申し訳ない、また、カワをみずに祭りをするとは何か大事だということになり、堤防工事の責任者である水資源開発団に水神宮の敷地を土盛りして高くさせた。他方で、集落でも講員からの寄付金を集め、この改修をおこなったのである。

（2）祭りの変化と祭礼の堅持

ここで、水神宮の祭礼を概観しておきたい。その期日は現在も旧暦の9月28日であり、これに合わせて毎年の祭礼が決まる。また、祭礼は集落の講員で当番をまわり持ちにしておこなわれている。当番は年にごとに、順に約10人かたちで5年ずつがまわされる。祭礼に関与すべき者は、区長2人、神社総代5人、当番の各家をそれぞれ代表する5人、次年の当番であるト当番5人、それに補宜を加えた18人から構成される。祭礼に向けては、前日に既に立って、新しい往還連が巻かれる。祭礼日は水神宮前にガザが敷かれ、そこに参加者が座って神事をとりおこなう。また、きたまら神がハラアワセで供えられる。祭礼は午前9時ごろから開始され、補宜が祝詞を奏上、また参加者全員が玉串を奉納する。神事自体は45分ほどで終わるとその後、同地にて御神酒が場で供され、ナオライがとりおこなわれる。さらに、集落センターではその後ナオライの祝宴が催される場がもたれ、そちらには集落の誰が参加してもよいことになっている。

祭礼にかかる費用については、白浜では毎年、水神宮の祭祀料として講員である各家より500円を徴収しており、これがあてられている。また、補宜の祈祷料は白浜の祭りという位置づけがされていることから、区費でまかなわれている。

以上からも、集落が水神信仰の担い手となっている様子が分かるだろう。ただ、昭和30年代には風が求めたナオライの祝宴も、北浦対岸での鹿島開発などを経て集落の産業構造が変化し、勤め人が多くなると、次第に参加者も減っていく。当然ながら、祭礼のあり方についても議論が巻き起こることもある。実際、平成16（2004）年の祭礼でも、当番を担う若い世代から総代（神社総代の代表）に、今後も水神宮の祭礼を担っていくためには祭礼の期日や休日への変更や準備の簡略化も考慮すべきだと相談がなされていった。このような、近年の社会的条件の変化によって水神の祭祀は不安定な存在になってきているようにもみえるし、祭礼のあり方が変化していく可能性をみてくることもできる。

この点について、若い世代の要求を一身に受けとめる総代長は「伝統を維持しながら祭りを変えていくのも難しい」とその苦労を表現する。ここでいう「伝統」には、祭礼の継承としての形式的な伝統と、水神とのかかわりのあり方の継承としての伝統といつ2つ側面があるだろう。そしてここでは、形式的な伝統の継承がつねに問題となりつつも、かかわりのあり方として住民たちは水神の祭りを堅持しようとしている、ということに注目しておきたい。

（3）水神と人びととのかかわり

では、住民たちはどのように水神とかかわっているのだろうか。たとえばある漁師は、区長や神社総代も務め、祭礼にも深くかかわってきた経験がある。だが、普段はとりかって水神宮に手を合わせるようなことはない。それは、水神宮を通じておける際に「オッ」と挨拶することで水神と通じているからなのだという。その挨拶のなかでは、水神と「水神さま、今日はご苦労さん、オヤジ（漁師のこと）ご苦労さん」というやりとりがあるのだといい、このようなやりとりの結果として、水神が「オレを通してくれる」のだという。しかもこれは漁師が漁に出るときだけに限らない。田を耕すときにも同様であること、水にかかわる際の、漁師のいっさいの健康を守ってくれるのだという。

つまり、この漁師は祭礼などの形式的なかかわり
を担って来たし，漁師自をもそのことを自負すると
ところであるが，それに加えて，水神と心持ちの水準
で通じている。だから，水に関するあらゆることか
ら水神が守ってくれるのだ，と考えている。
一方，水神に対する鮮明な記憶として残っている
経験を語る住民もいる。ある男性は，戦時中に招集
命令が出て出征することになった。戦地に向けてま
さに白浜を出発するというそのとき，男性は鎮守で
ある稲荷神社にて武運祈願をしてもらい，それから
見送りの人参ととともに渡船場に向って歩いていっ
たのだという。渡船場の手前には水神宮がある。そ
こで男性たちは歩を止め，水神宮にもう一度手を合わせ
，それから見送られたながら舟に乗ったというこ
とを覚えているという。また，普段の家では3
人の息子たちが戦地に赴いたというが，両親はその
間じゅう，鎮守の稲荷神社とともに毎朝，水神宮に
参りつづけたというのである。
結果として白浜に帰れたのは兄弟のうちでこの男
性だけであったというが，ここで男性が出征に際し
て祈った水神，また両親が息子たちの帰還を願いつ
づけた水神とは，もはや普段求められるような機能
を備えた存在を飛び越えている。このように水神は,
出発した湖から再びこの地に戻ってきたように
の祈りを含めて，住民たちの願いを受けつけ
る存在もまたしてきたことが分かる。
このように，人びとの心持ちの水準での水神との
かかわりについて，別のある漁師は“無事”とこれ
を表現する。その漁師も，普段はあらたまて手を
合わせるというよりも，水神宮のそばを通る際に按
拶をするように水神宮に携わっている。その按拶にお
いては，さまざまなことを水神宮に頼むことになる
というが，漁師にとっては実感として生活にしみる
漁業の割合が大きいので，現在も漁について頼むこ
とが多い。ただそういっても，それは魚が
よく捕れるように，というだけではけっしてない。
やはり水神は集落の住民すべての神であるという。
そのうえで，この漁師は水神に“無事をすこせよ
うに」との願いを託すのだといい，またそうしか
いないようがないというのである。
すなわち，白浜でこれまでみたような，水神と人
びとのかかわりのあり方とは，水神信仰のもつ機
能の分類という水準だけでは説明できない位相にあ
る。人びとはただ機能的な目的達成からだけで水神
に対象しているのではなく，内山節（1996）の指摘
している“無事”といった関係性の水準 にでの水
神とのかかわりをも保持しているのである。もちろ
ん，あるときにある条件のもとでなされる水神への
それぞれの願いは，水神信仰の個別の機能を映した
すものである。けれども，先に水神の分布から検
討した節でみた，鎮守の神社と地名と水神が一直
線に並んでいなければならないという意識や，
白浜でみたような，カワをみずしعقودの祭礼はおこ
なえないといったことだわりも，このような水準にお
ける具体的で個別的な水神との，換言すれば湖との
関係性のあり方からしかみえてこないのである。
加えて，重要なことは，白浜の人びとが水神を漁
師だけの神ではなく集落の神だと表明するとき，そ
こには自分たちの土地に暮らすすべての住民たちと
湖とのかかわりが念頭に置かれている点である。ち
なにに実際，ここで表示の意見として例にあげた住
民たちも，ともに，水神は集落のすべての人びとに
かかわる神だと認識している。つまり，現在の水神，
そして湖との関係性を引っ張っているのは漁業者で
あることは間違いないが，その底には，水神が
集落住民全体の神であるという認識が存在してい
るのである。

5. 結語

冒頭に述べたように，水質汚染を中心とした霞ヶ
浦の環境対策において，最近にいたって，人文社会
科学的分野からの分析が必要であることを，県の担
当行政の人びとも気づきはじめた。その理由は多様
であるが，本論にかかわる理由をあげならば以下
のような事情がある。すなわち，霞ヶ浦やそこへの
流入河川周辺の住民が水質汚染の被害者であるだけ
でなく，加害者でもある事実に思いいたったときに，
単に行政による上からの環境対策を多多是環境教
育強化施策だけでは不十分で，新しい視点として，
そこに住んでいる人たちの培ってきた水に対する価
値観に立ち戻って，そこからの政策を立てられる可
能性があるのかどうかの検討が必要である，と意識
されるようになってきたのである。
霞ヶ浦をかかえる茨城県は，平成15年度から県
下のコミュニティの強化に取り組んでいる。これは
茨城県独自の政策というよりも，コミュニティを基
盤にした参画と協働という全国のかなりの自治体が
おこなっている施策と軌を一にするものであるが，
霞ヶ浦の環境問題とかかわせてみると，それが固
有の必要課題をもつことになった。というのは他の
湖に比べて，霞ヶ浦では湖に対する地域コミュニテ
ィの関心が弱く，そのため，かなり大きなNPOが

46
コミュニティに代わって、活動をしているのが実態である。しかしながら、NPOの活動は地元の生活の内実まで入るのには無理があり、やはりコミュニティにそれなりの働きをしてもらう必要がある。コミュニティが無理なく水に関する政策にかかわる方策があるのだろうか。

そのような政策的課題をふまえて、いくつかの研究が現在進んでいるが、本稿でそのひとつとして位置づけたいという意図をもっている。役割分担としては、地元の伝統的意識から水にかかわる価値観を探ろうとするものである。本稿では水神信仰を選んだ。水神研究でいえることは限定があるが、水神研究をすることによっていかに市かみえないものもあるだろうという想定のもとにじましたものである。

本稿で明らかになったことは以下のとりである。まず、霞ヶ浦（西浦）全体の特徴として、水神信仰は「漁業の恵み」いう機能や、「水難の恐怖」の消解という機能が地域的に偏りなく広く分布していることが分かった。それは、現在、湖に関して居住する人がと、広義の漁業者であることにようと思われる。他者で、水の用水の恵みやや農業用水の恵み、また、水運業の恵み、という機能はもちろんみることができなかった。また、水神信仰に集落が想定よりも深く関与していることでも明らかになった。すなわち、漁業と水難を軸としながら、組織的特徴として、集落というコミュニティが、この信仰の維持に大きな役割を果たしていることが分かったのである。

さらに、湖面を向いて設置されている水神が多いこと、かつての舟溜りや陸地の先端部分に水が安置されていたこと、そして水神が基本的に集落に帰属するものであるということなどから、水神が集落の入口を象徴する役割をもっていたのではないか、と推定した。このことから、湖にかかわる自治組織としては伝統的集落がその単位組織となっていることと同様となる。

また、過去の調査に加えて、人びとが水神に何を祈り、水神信仰の何を継承しようとしているのかという点に着目してみると、水神信仰についての個別機能という分析ではみえなかったもの、すなわち、集落での生活を反映したところ、水に関するあらゆることを守ってくれる神としての水神という側面が浮かび上がってきた。それは「無事」を祈ることという形で現れている。ここでの水神は主として水をめぐる信仰の対象であるものの、極端な場合は、出征した息子の無事を見ることを使ったようなものも含まれていたことは注目してよい。

集落のような地域コミュニティは伝承の側面と革新的な側面の両面をもつことはいうまでもない。いま伝承という側面からコミュニティをみると、この霞ヶ浦周辺のコミュニティにとって、水神はコミュニティ内での水の象徴であることは事実である。ただ、本文にも述べたように、水神は基本的には漁業に携わる者たちの神という特質をもっており、他の地域でみられるような氏神信仰などの普通性はもっていない。だが、かつてほどではないとはいえ、現在でも水神信仰が集落を基盤として強固に根付いている地域も少なくなく、これがコミュニティと霞ヶ浦を結びつける回路のひとつであることは間違いない。現時点では、この回路をどのように活用するかという点については、具体的な展望はもっていえない。とはいえ、このような知見は、今後の水辺の地域設計や、地元で水のある方を討議するときの有効な材料になるであろうと考えている。

注
(1) たとえば佐賀泉（1999）は、霞ヶ浦（西浦）と北浦の湖岸沿いに81か所の水神を確認した。また、土浦市では14基の水神の石祠が確認されている（「土浦石仏」編集委員会、1985）。他にも、たとえば旧出島村（現かすみがうら市）では30基（出島村史編纂委員会、1978）、旧潮来町（現潮来市）で33基（潮来町史編纂委員会、1991）、旧江戸崎町（現稲敷市）で8基（江戸崎町史編さん委員会、1988）、美浦村で20基（美浦村史編さん委員会、1986）、旧北浦村（現行方市）で23基（北浦村教育委員会、1989）などの所在が明らかになっている。

(2) 調査は2004年7月～11月の間で行われた。対象となる水神の選定にあたっては、湖沿いに設置しているもの、見られたものについてできるだけ網羅する方法をとった。ただし、こうした、個別の水神の機能について明確に確認できたのは30か所、祀りの扱いについては28か所にとどまっている。本稿で論じるのは、主としてこの30か所および28か所の事例から読みとされることに限定されている。とはいえ、湖原の各市町村ごとに、機能や扱いに関する詳しい事例を原則として最も2つ含むように努めた。ちなみに、同じ場所に複数の水神の石祠が祀られている例が多数あるが、本稿では複数の場合でも1か所と、場所ごとにまとめるのがかたちをとっている。それは水神信仰の現在の扱い手に注目するためである。

(3) 本稿で扱う信仰手は、水神宮の祭祀や日ごすの世話を持ち上げられている主体、という意味で用いている。

(4) ちなみに、集落が主として扱い手になっているのは13か所、個人が扱い手となっているのは1か所説明でできた。また、ここでの集落とは、人びとの集落意識に応じて現実的には旧村を単位として多様なかたちをとるが、本稿では一括して集落と表記する。

(5) 旧霞ヶ浦町（現かすみがうら市）のB-06水神宮について
調査した仲田安夫（1975）は、集落の十人組と呼ばれる組織によって漁業発展。水難防止を願ってはじめられた水神宮の祭りへの参加者、明治（1873）年に16人だったのが、昭和27（1952）年には181人、昭和30（1955）年には193人にもならなかったことを当地の水神邪竪から明らかにしている。

(6) 今回の調査では押さえているが、井坂教は小川町の日小川河岸にある水神宮をとりあげ、かつて50余りの舟が河口に着陸停泊していた大正時代まで、水難業者たちによって水難者の安全を脅かす護持の神として盛んに祀られていたことを記述している。ちなみに水神信仰の機能は「河岸がさびつくるから水難防止を祈願するように変わった」（井坂、1975、91頁）ということであり、井坂の記述の時点ですでに「現代子孫は邪物国有されている」（井坂、1975，91頁）存在していた。

(7) 旧潮来町を中心に調査した藤島一郎は、水神の祠の建立と洪水の起こった年の関係から「水神の祠が建談されている年代は、水害があった年の次の年あたりに多く見受けられる」（藤島、1995，25頁）と記述している。今後、とくに旧潮来町についての調査を加えなければならないと判断されるが、現在の手土産データからは、この藤島の報告と現地の「水害の恐れ」の消解という機能と、それに明確な関係をみいだすことはできていない。

(8) 水の神が水利とかかわって信仰されていることは、研究歴の数をあげた小野（1979）も指摘しているが、全国的には広くみられる現象である。ともすると、湖岸域だけでなく湖川沿いでの水神信仰のあり方が見られるようになり、現在のところ、霞ヶ浦周辺の湖川沿いにおける水神信仰については、まだ十分な研究蓄積がなされていない状況にある。

(9) なお、多数の水神を湖岸に配置している事例は、同じ利根川流域に位置し近隣にも近い手賀沼については既出の柳（1996）の報告があるものの、他の湖水地域では報告されていない。とはいえ、手賀沼もそうであるように、水神信仰に限らず、特定の機能信仰においてその関係が集落であることは一般的であるろう。水神では、水神信仰の主体を時折の条件によって変化してきたふるさと愛の基礎、基本的な水神を集落と帰属すると人びとに伝えられている事実に基づくことである。

(10) 集落との関係において、集落の鎮守である稲荷神社の氏子組織は稲荷講と呼ばれ、これがあたると5の組分け、それぞれが組織をもっている。また、それぞれの組から神社総代が選出される。一方、水神祭礼に関する現在の講務員はこれら5の稲荷講の成員を合わせたものと同様となっている。

(11) 内山節は、区別の「無書」という感覚を、客観的対象としての自然を介するという意味での自然保護に対立させつつ、自然の無書として論じている。すなわち、村人たちは当然ながら村で暮らすが、それが自然の無書に関支えられているからこそ、村の無書があるという。そして「自然の無書と村の無書があらかじめ、私や我家の無書があるという感覚を培われて」（内山、1998，47頁）あり、「村に時空を共有している自然、村、私の相互の関係性の無書を考える」（内山、1998，48頁）ことを村人の発想として指摘している。

参考文献
網野善彦，1998，海と湖の世界，中央公論，113（10）
C.フラッカー，秋山と子沢，1979，あずさ弓——日本におけるシャーマン的行為，岩波書店
出島史編纂委員会，1978，出島村史（続編），出島村教育委員会
江戸崎史編纂委員会，1988，江戸崎の石仏・石塔（二）
江戸崎史編纂委員会
藤本正三，1992，青年と町の歴史，著書房
藤島一郎，1995，潮来町の水神社，藤島一郎編，水郷の民俗，水郷民俗研究会
池上正昭，1959，自然と神，信仰と民俗（日本民俗学大系8）、平凡社
井坂教，1975，旧小川河岸の水神社，茨城の民俗，14
潮来町史編纂委員会，1991，潮来の石仏石塔，潮来町史編纂委員会
北浦村教育委員会，1989，北浦の民俗，北浦村教育委員会
美浦村史編纂委員会，1986，美浦村石破物資料集，美浦村教育委員会
三宅友正，2004，麻生町平目における信仰形態の諸社——寺
院神社とその祭祀と習俗から，筑波大学民俗学研究室編，フィールドへようこそ！2003——北浦の民俗，筑波大学
民俗学研究室
宮本常一，1958，井戸と水，生活と民俗1（日本民俗学大系6）、平凡社
宮田登，1983，呪文の習性，宮田登著者代表，神と仏——民俗宗教の諸相（日本民俗文化大系4）、小学館
1993，山と川の信仰史，川口弘文
仲田安夫，1975，水神さまについて，茨城の民俗，14
直江広治，1971，利根川流域の水神信仰，九学会進利根川
流域地調委員会編，利根川——自然・文化・社会，弘文堂
野木覚一，1999，環境観と神観念，福井興義ほか編，大地と
神々の共生——自然環境と宗教（講座人間と環境10）、昭和堂
小野重朗，1979，水の神，五末重ほか編，水神観念と民俗（講
座日本の民俗宗教3）、弘文堂
大森両忠，1985，稲荷と水神信仰，日本民俗学，157
佐賀泉，1999，霞ヶ浦の水神社，筑波の友，18
高谷重四，1984，水の神——信仰と伝説，岩崎美術社
「土浦の石仏」編集委員会，1985，土浦の石仏，土浦市教育委員会
内山節，1998，近代の人間観からの自由，内山節ほか著，
ローカルな思想を創る——脱世界思想の方法，農豚文
裁，斎藤，1992，「日本風土記」行基関連語話小考——水神祭
落語試論、語話文学研究，27
柳川佳子，1996，我孫子市の水神，西郊民俗，157
吉成道樹，1991，七夕，盆行事にみる水神祭祀としての性格，
日本民俗学，187

【付記】
本稿は平成16年度茨城県（霞ヶ浦対策課）の委託調査「ミリオンズレイク調査研究事業」の成果の一部をまとめたものである。